ユニセフ映画上映会　　ドキュメンタリー＆アニメーション

はちみつ色のユン

監督・脚本：ユン、ローラン・ポアロー／　製作会社：モザイク・フィルム、アルテミス・プロダクシオン、フランス３シネマ、パンダメディア、ナダスディ・フィルム　／　国際配給：ワイド　／　配給：トリウッド、オフィスＨ　／　www.hachimitsu-jung.com

第３６回アヌシー国際アニメーションフェスティバル　観客賞＆ユニセフ賞Ｗ受賞

上映日時：２０１３年１１月２７日（水）　　午前の部：１０：３０～

午後の部：１４：００～　／　夜の部：１８：３０～

会　　場：せんだいメディアテーク　７Ｆスタジオシアター

（仙台市青葉区春日町２-１　電話 022-713-3171　　地下鉄勾当台公園駅下車　徒歩６分）

入 場 料：５００円　（事前にお申し込みください）

問い合わせ：宮城県ユニセフ協会　電話　022-218-5358　070-6617-6284

FAX　022-218-5945　E-mail：sn.municef_miyagi@todock.jp

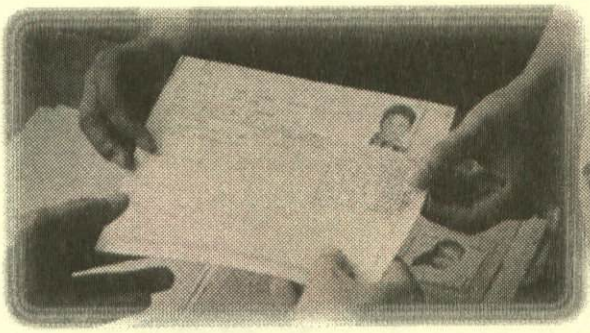
「お前にとって俺は本物の兄か？」
「・・・・変ね。あたしもつらい時に本当の妹かなって思うの。」
「間違いなく、おれの妹だよ。」

異文化と出会う 他人と生きる 家族になる

１９６０年代から７０年代、朝鮮戦争後の韓国では二十万人を超える子どもが養子として祖国を後にした。その中の一人、ユンはベルギーのある一家に「家族」として迎えられた。

髪の毛、肌の色が異なる両親、そして４人の兄弟、カテリーン、セドリック、コラリー、ゲール。生まれて初めてお腹一杯ごはんを食べ、おもちゃを持ち、路上生活や孤児院を忘れることができたユン。フランス語を覚え、韓国語を忘れ、絵を描くことで実母の幻影と会話しつつ、外見の違いを気にしない新しい家族と暮らす日々。そして、画才に目覚めていく。彼の第二の人生が始まった。

そんな時、「家族」にもう一人、韓国からの養女・ヴァレリーがやってくる。彼女を見たとき、彼は自分が何者なのか、を意識し始めた・・・・・。



血のつながりどころか、見た目も文化も違う者同士が親子関係を作る「国際養子」。そこの存在する、「家族」の一員になれるのか、という不安。さらに、大人になるにつれて、より強く意識する自分のルーツ。自分は何者なのか、どこからきたのか、という根源的な問いかけ。悩み、ぶつかりあいながら「新しい家族」を作ってきたユンとその家族の姿は、私たちの「家族」との距離、他人との関わり合いにある私たちの身近な悩みにそっと勇気を与えてくれるでしょう。

この作品の驚くべき点は、現代のソウル、当時の８ミリフィルムといった実写と、手描きやＣＧといったアニメーションの両方で描かれていることです。この多様な映像世界は、アジアで生まれ、実母と別れ、育ての親とヨーロッパで育ち、フランス語を覚え・・・というユン自身の目まぐるしい人生を、視覚的に追体験するだけでなく、リアルとセンチメンタルが入り混じった独特の世界を作り上げました。

韓国からの国際養子とは？

朝鮮戦争（1950～1953）後の韓国では、多くの戦災孤児や貧困により、２０万人を超える子どもが養子として祖国を後にしました。国際養子として韓国を離れた子どもたちも現在多くが 30～50 代となり、アイデンティティの喪失などによって生きづらさを抱える人もいれば、政治家、スキー選手など、複雑な出自にも負けない人も各所で話題になっています。本作の監督であり、マンガ家のユンも国際養子とし５歳にして韓国を離れ、ベルギーで育ちました。本作は彼のその数奇な運命を、彼自身が執筆したマンガ「肌の色：はちみつ色」を元にフランスのドキュメンタリー映画監督ローラン・ボワローと共同監督した。知られざる韓国国際養子の歴史を見つめた作品です。